

## 潰されることで建設する ルカによる福音書 18 : 31 - 34

18:31 イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。18:32 人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。18:33 彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」18:34 十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。

今日の説教は、聖書の研究から始めたいと思います。今日の箇所（新共同訳聖書）は、冒頭にある太字の題の後に、括弧書きでマタイとマルコにある同じ言葉（これを「並行記事」と言います）の章節が記されています。この並行記事というのは、ほとんど同じ文言なのですが、微妙に違っています。はじめにマルコ福音書が書かれ、それを土台にしてマタイとルカが、イエスについての別の言い伝えを組み合わせ、また自分の考えも織り交ぜて、それぞれの福音書を編集しました。ですから、並行記事を比べてみることで、それぞれの福音書の個性というか主張というかが分かるのです。

今日のルカの箇所を、オリジナルのマルコ福音書や、マタイ福音書と比べてみると、特別に違っているところがあります。ちょっとマルコとマタイも開いて、比べてみてください。特に32節と33節の並行箇所です。どこが違うのでしょうか。

一つ言えることは、マタイとマルコでは、イエスを十字架に追いやったのは、祭司長や律法学者のグループと異邦人、つまりローマの権力者、この二つのグループであったと書かれているのに対して、ルカでは「祭司長」「律法学者」という言葉が削除されて、ローマ人を意味する「異邦人」だけになっているということです。つまりルカの場合、イエスを殺したのはローマ人だと言い切っているということです。どうしてこのような変更をしたのでしょうか。

ルカ福音書には、権力者と社会的弱者を描き出すという特徴があります。第1章からそうです。冒頭には、恐らくローマの高位の人であったであろうテオフィロという人物に宛てた献呈の言葉があります。そして、「ユダヤの王ヘロデ」ということばでストーリーが始まります。イエス誕生のシーンは、「皇帝アウグストゥス」が住民登録の勅令を出したことでイエスの両親が、出産を直前に、宿る場所に心当たりもない旅に出なければならないという難儀を背負わされた話で始まります。そのほかにも、徴税人、寡婦（やもめ）、らい病人、盲人、悪霊に取り憑かれた人、虐げられた子どもなどが登場します。このようにルカには“権力者”と“弱者”が登場し、前者による後者への抑圧を非常に意識しています。

ローマといえば当時の人々にとっては全世界に唯一存在する絶対的な権力、女神ローマでした。この絶対的な権力、神格化されたローマが、イエスを十字架に磔にしたという見方を持っていたことが、このルカによる並行記事の改変の理由のようです。この聖書研究から見えてくるイエスの十字架の意味とはなんなのでしょうか？それは、この世のあらゆる力を統括する宇宙最高の権力によってイエスはひねり潰されたということです。逆に言えば、真の神は、御自分を権力者によっていとも簡単にひねり潰される人々の側に身を置かれたということ、そして、ひねり潰されることの中で、御国を建設なさるということです。

潰される人々ということで私の心に思い浮かぶのが、ひきこもりの青年たちです。私が

関わっているフリースクールのあるひきこもりの青年は、善意の塊のような人で、他人を絶対に悪く考えません。その分、自分を責めることになり苦しくなる人でした。今の学校では、このように特徴のある人達ははじかれてしまいます。外国の社会学者は日本の学校を、「時代遅れなほど統制的で、逸脱とみなされる行動が他国に類を見ないほど極端に多い」と指摘し、これが日本独特の社会現象である不登校やひきこもりの要因だと言っています。

インターネット上には、「普通に生まれたかった。」という若者たちの苦しみの声がたくさんあがっています。感受性が強く、自分が他人と違うことに悩み、他人の痛みも自分のことのように感じてしまう人々がいます。学校は、自分の意思を殺して集団に溶け込まなければならず、自分が苦しいだけでなく、友達の姿も可愛そうで見えられないと感じているのです。そして、普通の子に生まれたかったと嘆かざるを得ないのです。

今、学校の現場は、昔のようなおおらかな場所ではないのでしょうか。がんばれる子しか生き残れないような…。個性的な少数者は潰されるほかないのでしょうか。先日、フリースクールから15周年の記念誌が届きました。その裏表紙に、このような言葉が書かれていました。「誰かに助けてほしい私たちは、誰かに助けてほしいそのまま、誰かの助けになれるだろうか。」実は、私自身もそういう問いを持っている一人だなあと感じました。弱くなり衰えていくそのまま、人の助けになれるだろうか。

このフリースクールは介護保険事業所と託老所を併設していて、フリースクールの青年たちが何名か働いています。こんなエピソードがありました。食堂のいすに座ってボーっと一日を過ごしている認知症のおばあちゃん。口ばかり達者で体を動かさない一人の青年を見るに見かねて、突然、「バン」とテーブルを叩いて言いました。「あんた！若いんだから、しっかりしろ！」それから毎日、このおばあちゃんはその青年を連れて散歩するようになり、そうこうするうちにおばあちゃん、みるみる元気になり退所していきました。

「誰かに助けてほしい私たちは、誰かに助けてほしいそのまま、誰かの助けになれるだろうか。」わたしたちはそういう人間ではないのでしょうか。イエスは十字架にかけられます。彼はその姿のままで、隣にいた犯罪者を救いました。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」ここに神の国があるのです。潰されていく、そのまま建設する。これが神のなさったことであり、今もなさっていることです。